

# 『渋沢栄一伝記資料』の成立、意義

2016.12.3(土)

於 渋沢史料館会議室

渋沢史料館 井上 潤

## ☆ はじめに —いま、渋沢栄一が注目される背景

- ・客観的、学際的な調査・研究の蓄積
- ・広範な調査・研究の基となる記録資料・情報の発掘、整備の推進

## I. 『渋沢栄一伝記資料』の成り立ち

### 1. 前史

- ・「雨夜譚」筆記 ⇒ これは世のため人のためではない、身近な者が「我が仏尊し」と思ってくれば、それで望みは足りる【記録】
- ・『竜門雑誌』⇒ 栄一の動静の記録化【記録】
- ・『青淵先生六十年史—一名近世実業発達史』  
⇒ 栄一の還暦祝い「六十年間の歴史を編纂するのが最も適当なる方法」、「雨夜譚」の活字化  
⇒ 序文「(栄一の)徳澤ヲ伝彰」「財政経済ニ関スル学科ノ為メ最モ有益ナル一部ノ参考書ヲ世ノ学者ニ恵ムコトヲ得ルモノト確信ス」【公開】
- ・「青淵先生伝」⇒ 中止

### 2. 渋沢敬三による方向転換

#### \* 伝記でなく伝記資料へ

…一体おぢい様の伝記に付て私の意見としては、同族なり又事務所なりで書き上げると兎角我田引水的になり勝であり、又よしや左様でなくとも我田引水的であると見られるから面白くない。

竜門社で書くのさへ同様の理由で感心しない。故に伝記を書くのは全然外部の人に願ひたい思つて居ります。然し我々としては、伝記として書き上げないからと云うて、全然関はらぬと云うのは又よろしくない。資料は是非我々の手で出来るだけ蒐集して置かねばならぬ。如何なる微細な事でも、又一見つまらぬ様な事でも、ありのまゝに出来得る限り集めて置かねばならぬ。そして後に伝記を書く人に自由に使用させねばならぬと斯様に考へて居ります。(『渋沢栄一伝記資料』別巻5)

#### **\*幸田成友氏による編纂・刊行事業**

竜門社が企画し、1932(昭和7)年4月から幸田成友氏を編纂主任に委嘱、10名の編纂委員一応、1935(昭和10)年12月に一段落を告げ、全資料を編年体を集輯し、ほぼ遺漏なきものができあがった

さらに完璧を期したいとする敬三の発議により再度竜門社の事業として更始することになった

#### **\*土屋喬雄氏による編纂・刊行事業**

1936(昭和11)年、編纂主任を当時の東京帝国大学教授土屋喬雄氏に委嘱し、21名の編纂委員太平洋戦争に突入し、情勢困難を極め、1943(昭和18)年3月をもって編纂を打ち切り

編纂済み原稿や重要資料を当時の第一銀行本店の地下金庫に保管

1944(昭和19)年6月、打ち切り前に出版を依頼していた岩波書店から第1巻のみが刊行された。この時のものは、A5判で600頁乃至1000頁のものを70巻の刊行予定であったが、結局、第2巻以降は刊行されずに絶えてしまったのである。

1954(昭和29)年10月、またもや渋沢敬三の推進により、会長に矢野一郎氏が推され、理事9名、監事3名、顧問31名からなる「渋沢栄一伝記資料刊行会」が発足し、改めての編纂事業開始第一銀行の地下金庫に保管された原稿・諸資料が約10年ぶりに運び出され、その原稿の整理と全ての目録を作成するところから着手

B5判800頁平均で45巻の見込みでスタートし、第1巻が、1955(昭和30)年4月に刊行

1962(昭和37)年1月に68巻に増巻することに決定

日数、費用等の問題から全68巻中、別巻10巻は後日、機会を選んで刊行することとし、本巻の58巻の刊行をもって一応終了することを同年8月に決定

第58巻(索引)が、1965(昭和40)年2月に刊行され、「渋沢栄一伝記資料刊行会」は解散され、本編纂事業は修了

### \* 竜門社による別巻編纂・刊行事業

すぐ後を受け継ぐ形で、別巻の編纂が、今度は竜門社の直接事業として進められ、1966(昭和 41)年 4 月に別巻第 1 が刊行され、1971(昭和 46)年 5 月に至るまでの間に、日記・書簡・講演・談話・遺墨・写真を 10 巻に収められた。ここに、『渋沢栄一伝記資料』全 68 巻が完成

☆『渋沢栄一伝記資料』編纂終了後、編纂に用いられた原資料は、渋沢栄一の事績・思想を示す貴重な資料として整理が進められ、「渋沢栄一資料室」として一部の研究者・学生の利用に供してきた

## II. 『渋沢栄一伝記資料』の内容

### \* 編纂方法

栄一の誕生〔1840(天保 11)年 2 月〕から大蔵省退官〔1873(明治 6)年 5 月〕までを第 1 編とし、第 1 巻から第 3 巻に編年体で編成

大蔵省退官以降実業界での役員の大半を引退した 1909(明治 42)年 6 月までを第 2 編とし、第 4 巻から第 29 巻に収めらる

それ以後、栄一が没する 1931(昭和 6)年 11 月までが、第 3 編として第 30 巻から第 57 巻に収めらる

第 2 編以降は、各事業・各事項別に編成、但し、各事項内においては、編年

⇒第 2 編以降で述べられている時期になると、栄一の活動が広範なものとなり、単純に編年体で編成すると、かえって混乱を招くおそれがあることを考慮してのもの

### \* 各項目における資料の配列

順序としては、綱文・基本資料・参考資料および其他の資料となる

基本資料は、直接当該事項の典拠となる資料であり、綱文は、基本的にこの基本資料の要点をまとめたものである。〔参考〕として掲げられた資料は、基本資料を補足すべきもの、もしくは基本資料に記された事件の背景を示すべきもの等であり、〔其他の資料〕は、一綱文を立てる程でもないが、事歴に直接関連する断片的資料である。なお、関係事業の資料であるが、全く綱文を立てられないものについては「○○関係資料」という形になっている

## III. 『渋沢栄一伝記資料』の意義

- ・資料・情報の保存・伝承に大きな貢献
- ・一人物を包括的に把握できる
- ・一人物の事績を通して、日本の近代化・産業化把握の一助

- ・残存資料が網羅的に収載され、一つの事項に関して周辺資料・参考資料まで概観できる

⇒渋沢栄一に関する資料調査・研究用インデックス

- ・不変の事績をその時代・時代で評価できる

- ・資料分析、資料批判は行えているが、専門分野の目を通しての事前調査は十分だったか

- ・見え隠れする編纂主任、編纂委員による収載した資料、事績の取捨選択

- ・編年では捉えられない ⇒ あくまでも事業別(一部除く)

- ・人的な交流からのアプローチが困難

#### ☆ おわりに — 『渋沢栄一伝記資料』の今後

新たに確認された資料をもとに再検証、再構成